批評・紹介

六朝陵墓調査報告

中央古物保管委員會調査報告第一輯

民國二十四年刊、四六倍、二一八頁、圖版五二地圖七葉、定價十元。

ヴェテラン朱希祖と新進の滕固、朱偰のコンビになるもので、支那古蹟調査最初の報告とも見るべきものである。劈頭「余日本今西龍君高麗諸陵墓調査報告書を讀むに云々」の序ではじまり、隣邦古蹟調査の第一歩が本邦學者の影響乃至刺戟の下に生れたことを知つて愉快であるが、また同時にわが國の先覺故關野貞博士等がこの六朝陵墓の調査に際してとられた支那側の妨害的態度も想起されて暗然たる氣持は掩ひえない。學問に國境がないといふやうなことは單に机上の空想にすぎないのであらうか。

朱希祖「六朝陵墓調査報告書」は吳東晉宋齊梁陳の六代帝陵を考究し、そのうち遺物の徵すべきもの十一、それに王墓九、未考定墓八を加へて總數二十八を得、その文獻考證、遺跡調査を述べ、從來南朝陵墓研究の權輿であつた張璜（Mathias Tchang）の Tombeau des Liang, (Variétés Sinologiques no. 33) Changhai 1912. に增益すること十五、誤を正すこと五、疑を指摘すること一と自負してゐる。考證精密、代つてこの方面の權威となつたものであらう。滕固「六朝陵墓石蹟述略」は神道石柱にフリューティング、方板など漢琅邪相劉君石柱、驃騎將軍石柱などの傳統を認めるとともに阿育王柱の影響を認め有翼石獸（麒麟、辟邪）にはアッシリアの影響を認めるがその中國流傳は周代にありとし、しかも形態の上では實在の獅子や角端の形が入つてゐるといひ、碑飾では北朝碑に比して簡樸だといふ。最後にこの石彫類が漢代石彫と唐代陵墓諸獸との間にあつて、こゝに一聯の發展がうかゞへるといふのは正しいが、その發展が追究されてゐないので淋しい。朱偰「六朝陵墓總記」は陵墓體制を記し、皆低濕地にあり岡阜を背にし、原野に臨んでゐるのを注意してゐる。ところが朱希祖が前篇で張璜の一誤にかぞへた棲霞山獅子衝宋文帝陵說をとり、極力考證した陳文帝說を採用してない。また後の天祿辟邪考の意も體せず、雙角を天祿、獨角を麒麟、無角を辟邪とし、前篇中

に「頗る笑哂に堪へたり」とした贔屭の稱を龜趺に與へてゐるなど用語の不統一、結論の矛盾を暴露してゐるのはどうしたわけか。朱傑は別に『建康蘭陵六朝陵墓閲考』(史地小叢書)の小冊がある。一讀して大體を知るには却つて便利な書である。朱希祖、「六朝建康冢墓碑誌考證」は南朝碑誌の復舊と考證につとめ、總括的に四つの事項を證明しうるとする。第一は史書の脫誤、第二は文藝の變遷卽ち文章と書道の變遷、第三は門閥の貴、卽ち通婚族的の制約、第四は離婚再嫁の風である。この編朱氏の面目躍如たるものを覺える。朱希祖「天祿辟邪考」は『漢書』西域傳の孟康注をとり、獨角獸を天祿、兩角を辟邪と稱するのを正名とし、これを麒麟とよび、師子とよぶは俗稱である。桃拔はこれが總名であり、無角の獸はこれを符拔といふべきである。行論明快、齒切れのよい好論文である。また天祿辟邪の結論も正鵠をえてゐるが、やはり考據家らしい口吻は掩ひ難い。考據正名家は細密な考證をやりながら、前提が常識である。前提が常識だといふのは前提が不用意なことである。だから折角の結論が何にもならぬことが往々である。前提とする天祿辟邪も獸名だ、實在の獸名だとするところにより根本の問題があると思ふ。天祿辟邪は獸名かも知れない、しかしそれは山野をかけめぐる獸ではなく、殿閣の、或は陵墓の前面にそなへつけられたところのつくり獸でしかない。これは漢代の用語例を見てわかると思ふ。この造形物としての獸(形ばかりでなく、意味の上にも)はもとより部分的にか全面的にか自然の獸形より出たことであらう。しかしてその社會的な機能はちがつてゐた筈である。その機能の積極性と消極性を端的に表明してゐるのが、特名たる天祿辟邪の名稱である。これは自然動物ではない。こゝにこの名稱がもつ內容、特に形態の多樣性浮動性があり、獅子とか麒麟とかいふ名稱との錯綜がある。この錯綜を容認し、そこに當代人の心情を見きはめることこそより深い文獻理解の態度ではなからうか。古い考據家、文獻學者に反省してほしい一面である。朱希祖「神道碑碣考」では神道とは神道を標示して左右に立つ石柱であり、また闕と稱せられる。碑は下棺の碑より出で、木をもつて製し、穿あり、碣はまたもと木をもつてつくり、圓木にして地に立つ、石柱、表、標、桓ともいひ、また俗に華表ともいふ。梁の石柱は正しく碣と稱すべきであるといふ。石柱のもとが碣だといふのはよ

い。しかしこんな擬古的な名稱を用ゐないでも、六朝では石柱といふ名（後漢書、水經注、）が立派に行はれてゐるのである。朱希祖、「駁晉溫嶠墓在幕府山西說」は陳迺勳『新京備乘』等の溫嶠墓幕府山西にありとする說を駁したものである。

要するにヴェテランは堅實なだけに新味がなく、あくまで文獻考據であり、新進はなほ立場が曖昧で方針がたゝず、多少見當のついたことも、それをつきつめて論究してゐない。殊に造形美術としての取扱ひは甚だ不充分である。この點支那の美術考古界一斑を反映してゐるやうに思へる。この書も文獻考證は朱希祖の手をつけられたゞけに永く南朝陵墓研究の準據となるであらう。しかし遺蹟の調査は甚だ不充分で、寫眞の復成はセガランの圖錄に遠く及ばぬ。セガランもまだ圖錄だけしか公表されず、關野博士等の結果もまだ公刊されてゐないが、遺蹟遺物の調査はこれ以上にでゝゐるとも推察されるのでその公表を鶴首するとゝもに支那新進學者の折角の努力をこの方面に期待したい。

（水野清一）

前滿洲の開國と日本

稻岩吉著

昭和十一年六月、京城熊平商店發行、菊判六一頁、非賣品。

著者の所謂前滿洲とは開國期の清朝を指して言ふ。著者の同方面に關する幾多精緻なる好研究に就いては、學界已に周知して剩さない。本書を目して此等諸研究の成果とし、總論とすることは妥當であらう。

著者は、本書の主旨とする所を冒頭して、現滿洲帝國は現代日本の助力によりて成立したものであるけれども滿洲に於ける日本の力の顯はれは、今日に始まつたものでなく、前の滿洲卽ち清朝開國の際も同樣であつた。たゞこれらの次第が從來の史書に表面化せなんだといふにとゞまるであらう、われらはこの一大事に對しては、更めて意識すべきであると强調し、次ぐ本論に於いて、清の太祖の興起に對し、我等日本人が、如何に我等日本人自らの意識せざる作用を及ぼしたものであるかを、明確な史實に立脚して論述した。

我等自らに殆んど意識されない乍ら、清朝の興起、從つて當時東亞大局の上に最も重大なる作用を及ぼしたも